

## 2. 「東亜同文書院と中国研究」

藤田佳久

藤田 では、座長をやりながら大変恐縮ですが、私のほうから二つ目の発表をさせていただきます。私は書院の歴史をさっと流しながら、大旅行等を中心にしてお話しをさせていただきます。テーマは「東亜同文書院および東亜同文書院大学と中国研究」です。ではお願いします。

これが先ほど燃えたという東亜同文書院の校舎の燃える前の校舎の姿で、交通大学の隣にありました。その当時の正面玄関です。書院の創立にかかわる人物として、この3人の方を挙げるができます。一番右の方は根津先生で、初代から院長を務められました。真ん中が、書院の企画を持った荒尾精という方です。この方は愛知県出身ですが、若くして中国へ渡られ、何年間か現地でごっています。日本人がそれまで知らなかった中国の実像を把握して、「清国通商総覧」という大部な本を初めて日本で出版しました。いま流にいうと中国商業地理という内容だと思いますが、その内容に日本人がびっくりし、非常によく売れた本です。一番向こうが近衛篤磨という方で貴族院の議長等もされた方です。そういう荒尾、根津の企画を持ちつつ、この方は欧米からさらに中国の旅行、世界一周旅行をされて、最後に中国へ渡られ、その中で東亜同文書院の中国での開設の具体化を図った方です。当時の清朝の政府の方々とも話し合いをする中で、南京に東亜同文書院を立ち上げ、それがやがて上海へ統合するかたちで1901年に東亜同文書院の開学に至ったということです。

その流れをずっと見ていきますと、書院開設より前、荒尾精が清朝下の中国でのいろいろな情報を初めて日本に知らしめた人物で、その意欲を汲んで当時は軍関係の学校で荒尾と親しい関係を持っていた根津一が中国をきちんと知ってそこで

の貿易取引を促進しようということで、日清貿易研究所をつくった経緯がありました。これは研究所という名称ですが学校です。この学校は1890年からスタートし、94年に日清戦争が始まって中断してしまうのですが、いってみれば貿易実務者養成学校でビジネススクールです。

日本では日清戦争後、いままで欧米志向だったのがアジアにも目を向けるようになり、いろいろな団体ができあがりますが、その中の二つ、東亜会と同文会が合併をします。そのときの同文会の指導者であった近衛篤磨が、比較的政治的な発言の多い東亜会を少し抑えられて、ご自分の文化交流事業というかたちで東亜同文会を設立しました。これが1898年から1946年まで続きますが、最初の会長が近衛篤磨でした。

目的は、清国の保全と清国の自強。それから興亜と日中提携を掲げ、そのための手法として中国の教育文化事業を実現する。そして先ほど申しました、南京の同文書院をつくったあと上海で東亜同文書院をつくられました。その他諸々の団体も少し影響していますが、基本的な流れはこういうかたちで、それが戦後の本学にかかわっているという歴史をたどっています。

教育文化事業の始まりとして、まず東京に同文書院をつくって、中国からの多くの留学生を引き受けました。中国の留学生を日本へ招いたわけです。一方朝鮮半島のほうでは、それぞれの場所に語学学校や普通の学校をつくりました。当時朝鮮半島は、義務教育もありませんでした。そういう教育が非常に重要だということで、こういうところに学校をつくられています。その後南京の東亜同文書院ができ、それが上海の東亜同文書院大学になりました。そこにやがて中華学生部をつくったり、さらにその後北京経専や工業高専等も合わ

せています。

そして天津に中日学院、あるいは江漢中高というかたちで、中国の方々も入れた学校経営も行いました。したがって、全体とすれば東亜同文会の経営主体は、日本および朝鮮半島、中国という東アジアでの、学校教育を通じて文化事業を展開するところに目的を置いたことが非常にはっきりしていたわけです。

最初は東亜同文書院が民間団体でスタートしましたから、お金がありませんでした。初代の根津院長はずいぶん金策に工夫したようです。書院に入れる学生諸君も、根津院長が全国の知事を回って各県でお金を出してもらって県費生というかたちで書院へ入学する方法を依頼しています。全部の県がすべてうまく受け入れたわけではなく、学生を1人しか送れないところもあるものの、原則としては2人送ることで、全国でだいたい60人程度を毎年上海へ送り込むことができました。競争も非常に激しく、しかも授業料はただでしたから、東亜同文書院は優れた学生諸君を集めることができました。

これは最初の3年制の学校として、専門学校としてスタートしたときの最初の教育カリキュラムです。ご覧になってわかりますように、倫理や法律、商業関係、中国語あたりに非常に力点を置いた、紛れもなく貿易実務者養成の学校であったということが非常にはっきりします。そういう点で、私は東亜同文書院がビジネススクール的な学校であったと言っていますが、そういう色彩が非常に強かったと思います。

上海で学校が始まり、学生諸君が最初のころにやったのは、上海や漢口、天津、北京等の大きな都市を中心にした商業取引の実態調査で、一生懸命にやりました。それに絡めて、中国全体の経済活動の全貌も、なるべく文献も集め現地調査もやりながら、調査研究を行いました。しかし学生諸君も学校にもお金がありませんでしたから、修学旅行的に一斉に近場のあちこちへ行き、それを修

学旅行で何とかこなすことくらいしかできませんでした。当然、学生諸君はもっと全国へ行きたいという要望を持っていたのですが、学校にはそんなにお金がなかったのです。

そのころ日英同盟が結ばれて、日本の外務省にイギリス政府から、清朝の西の方にロシアの勢力がずいぶん浸透してきているから調べてほしいという要請がありました。日本の外務省はそれに対する手段をまったく持っていませんでした。そこで上海の根津院長にお願いして、2期生の卒業生5人をあちらこちらへ派遣しました。1年がかりで現地に入り、また1年がかりで帰ってくるといって大変な大旅行で、死に目に会いそうになったケースがたくさんありました。現地へ入りますと、すぐにロシア兵にあとをつけられたりして、いろいろな意味で大冒険旅行でもありましたが、初めて日本人の目によって現地の調査が行われ貴重な成果が得られたわけです。

その結果、外務省が約3万円を書院に寄贈し、そのお金を使うとだいたい3年間は学生の中国調査を大規模に行うことができるだろうということで、ここから初めて大調査旅行がスタートすることになったのです。これは当時、5人のうちの1人波多野養作さんという人が新疆の西のほうまで調査に行ったときの写真です。歩いたり馬車に乗ったりしましたが、車に乗るとすぐに痔になってしまうようで、ずいぶん苦しんだという日記が残っています。

そしていよいよ、ズタ袋を持ちながら2人から6、7人くらいのグループで、最終学年が中国各地へ出かけて行けるようになりました。それが大変なエネルギーであったことは、旅行の全貌がわかるとよくわかりいただけだと思います。

いくつかの班をご紹介しますと、このグループは上海からスタートして長江を上り、漢江から北のほうへ行っています。それぞれの学生たちは調査目的地を設定してそこで卒業論文を書きますが、とにかく目的地へ行くまではなるべくあちら

こちらを見たい、その道中はなるべく広く見てみようということ。こちらのグループもそうで、東北地方である満州のほうへ出かけ、現地では非常に広く、約3カ月から5カ月旅行しています。このグループは南のほうへのコースです。南の海から雲南へ入って、上流や中流の黄河を下って戻ってくるようなコースです。

当時の一般の日本人は大きな町にしか行かなかったのですが、学生諸君は中国大陸の奥深くへ行き、農村の人たちと多く接しています。書院の人たちで中国が大好きになった人が非常に多い背景には、農村の人たちとの交流もずいぶんあったと思います。いろいろ書かれていた日記を見たり、あるいは調査旅行の卒業論文を見るとそういう雰囲気伝わってきます。こんな写真が残っています。黄河下りで、羊の皮の袋で下っている様子です。これは黄河の途中のユートピア三角州のところで珍しい風景です。

東南アジアへも行っています。当時の独立国はタイだけでしたが、東南アジア諸国を巡ることによって、当時の東南アジアの置かれた植民地としての状況に非常に深く関心を持っています。しかし東南アジア諸国は植民地下で非常にインフラが整備されており、中国旅行に比べると早く進んでしまうことにびっくりしていますし、多くはフランス領でしたから、書院生の後輩に対してフランス語をもっと勉強しろと言っています。それから、フランスの支配に対する反発のような記録が随所に見えています。

これはベトナムのアンナン地方の北部で、フィリピンから南のほうをずっと一周してきたコースです。これは、昨年100歳を迎えられた安澤さんのルートですが、雲南からビルマに入って帰ってこられました。これも大冒険旅行です。安澤さんは絵もお上手で、少数民族の絵等もその中で記録しています。当時の東南アジアのいろいろな写真も入っています。

一方、満州事変が起こりますと、さすがの中

国政府も2年間は書院にビザを給付しませんでした。したがって、書院生は中国大陸の旅行を夢見ているながら、満州しか行けなくなってしまいました。そこで、満州の各県に入って調査をしています。その訪問した先の県名を示してみましたが、これが2年間続きます。その前から満州調査はやっていましたが、この時期に集中的に行われ、結果的にあの時代の東北地方・満州の調査が詳細に行われたことがわかります。これは小興安嶺です。大興安嶺のほうも横断旅行をした記録があります。

当時は、辛亥革命のあと多くの軍閥が各地で勢力を握っています。呉佩孚とか曹錕など、当時の著名な軍閥は、軍閥といってもインテリの指導者です。こういう見事な揮毫を、書院生は出かけて行っては直接面談をしてもらってきて、それらが旅行記の巻頭を飾っています。

17期から22期の調査旅行コースのうちの調査対象別の調査地を示してみました。調査項目がしだいに細分化され、やがてこれに教育や民俗、歴史などが付け加えられていきます。それがやがてアカデミックな雰囲気をつくり出して、後に大学に昇格する一つの大きなきっかけになっていったと思います。こんな発展が、この中間の時期にできます。

ところが日中戦争等が始まりますと、中には四川省の方まで行ったグループもありますが、多くのグループはこういう北京から広東をむすぶライン以東のコースくらいしかたどれなくなります。すなわち、日本軍が力を持っておった範囲だけしか旅行コースができなくなっているのです。1920年代が発展、成熟期でしたが、30年代の半ばくらいからしだいに縮小期に入っていく、書院最後の38期生のころにはさらに沿岸部のほうにしかコースが設定できなくなっていく。大学に昇格した40期以降は、各ゼミ単位で旅行が行われますが、新設された専門部も含めてほしいという範囲でしか行われなくなりました。北のほう

では青島あたりまでですね。満州では奉天あたりです。華南、華中では広州、あるいは漢口あたりです。

これを全部、各期別に何コース行われたかを合計しますと、全体として大ざっぱにいて約700コース実施されています。その中には東南アジアも入ります。私は地理学をやっていますが、学生の身分ではあってもこれだけの規模を半世紀に渡って大規模に行ったのは、地理学史の中でも他にケースがありません。

これは5期から23期までの「大旅行」のコースマップです。こんなかたちで中国本土を歩き回っていて、それを密度分布で表現したものがこれです。このように中国研究は、先ほど申しました荒尾精の情報収集と、根津院長の編集でそれを整理して出版した『清国通商総覧』という1000ページを超える大部なもの、それから先ほどの2期生5名による西域調査です。そして、調査旅行が本格化していきます。

一方、そのためにも最初から語学が必要でした。あとで今泉先生のお話がありますが、語学教育のために『華語萃編』等の初めての本格的、実践的な教科書がつくられ、教育が行われました。そして先ほどの旅行を通して、まず『支那経済全書』全12巻、中国のエンサイクロペディアでしょうか。それから各地域史、地理誌ですが、『支那省別全誌』18巻です。そして研究として『支那研究』、あるいは講座本。それから新しい『新修支那省別全誌』を編纂刊行します。これは戦争の激化により9巻で終わってしまいます。大学になってから、『東亜調査報告書』という、大学の学生のゼミの報告書が出版されたりしています。これ以外にも、多くの中国や満州の年鑑があります。多くの関係書物が、各研究者によって出版されています。

調査旅行の報告書の性格ですが、学生諸君は特に、報告あるいは日誌の部類は事実しか書いてはいけないということでしたので、現在から見ても客観的な資料として非常に価値がある内容だろう

と思っています。それを指導したのが、書院卒業生の馬場鉄太郎という先生で、中国地理の大著や中国地理の背景を出版したような地理学者であります。

研究がこういうかたちでさらに広がって発展していきますと、それらの調査報告をさらに活用することができます。これは私が後追いをして手書きの原稿を少し活字化して出版したものです。例えば、これは12期生の調査報告書だけを取扱ったものですが、どれだけの紙幣、貨幣がコース沿いで使われていたかを抽出したものです。当時中国は統一貨幣はありませんでした。こんなかたちで貨幣の種類を分布図に表すことができます。

そうすると、同じ貨幣がある種のみとまりを示す分布傾向がみられます。これは当時の経済圏の分布図として見るすることができます。

今度は言葉です。言葉もどういう言葉が話されているかを図に示していきますと、これも同じような、言葉の共通の広がり部分が出てきます。これは言ってみれば中国の文化圏の分布図を表したものとと言えます。

両者の分布図を合わせますと、経済圏と文化圏がほぼ重なるかたちののみとまりが出てきています。これは中国を理解するうえで、基本的な地域構造を示したものとと言えます。私は地理学をやっているものですからどうしてもこういう地域的視点が現象をみますが、こういう作業で調査報告書から当時の中国像を浮かび上がらせることができます。

次にこれはアヘン用のケシがどこで栽培されていたかを分布図として示したものです。調査旅行中にいろいろな事象が観察されていますが、アヘン用のケシは西北の畑作地帯が多いようです。これは土匪の分布図です。黄河の氾濫によって農民たちが家を失って土匪に変わったのがその起源だといわれますが、辛亥革命後の軍閥の戦争の中で土匪に転じた兵士もずいぶん多いようです。だいたい目が届きにくい各省の境目に集中的に分布

し、書院の人たちも結構土匪に遭遇して危うい状況までいったケースも記録されています。

五・三〇の事件の話が葉先生からもありましたが、あ のとき書院の学生が旅先の各地で出会い、記録した反日、反英、排外運動の様子を分布図として示したものです。かなり広い範囲に見られ、中国人に最初のナショナリズムを与える契機になったように思われます。また、これは軍閥の人たちの勢力圏の図です。書院生はコース上で軍閥間の戦争がある場合には戦場に入ったりしました。大変危険な旅行でもありましたが、そのデータを使いますと当時の軍閥の勢力範囲がこんなかたちで表されます。

軍閥の人たちは、近代化戦略をもっていました。多くの軍閥は当時日本へ留学をした人たちが多かったのですが、この時期、公園をつくったり都市計画を実行したり、さまざまな近代化を試みています。これは四川の近代化の例です。

大連や營口や安東、奉天といった東北・満州のほうへ、大陸から多くの漢民族の人たちが移動していくという報告書もあります。春先に満州へ移って行って年末に山東省へ帰ってくるような出稼ぎ形態の人たちの様子も、大連の報告書からわかります。大連へ来た漢人たちが、こういうかたちで満州へ散らばっていったというデータです。これも書院の人たちの報告書の中から復元しますと、特に山東省の人たちが東北へ渡って散らばっていった様子がわかります。

長い中国の歴史の中で、辛亥革命以降、いわゆる資本主義化が始まります。しかしそれは一部であって、伝統的な中国のシステムもずっと継承さ

れてきたのです。それが戦争と戦後の政権の変化、あるいは文化大革命の中で完全に切れてしまいます。その後の1970年代末の改革開放以降、資本主義化の波が浸透してきています。その中のシステムは、全部ではないにしても民国期の資本主義の復元の部分も結構あります。今日の中国を理解するうえで、書院の人たちが記録した中国の近代との接続はかなり可能になることとなります。それを通して分析することにより今日の中国の経済、文化、あるいは社会のさまざまな基本的仕組みを解明することができるのではないかと考えられることです。

書院最後の学長が本間先生でした。この方が事実上愛知大学を設立されたということで、ここからは今日の愛知大学の話になります。これは愛知大学本館の前で、大陸から引揚げてきた学生諸君が記念撮影しているところです。書院を中心に大陸からの諸大学の引揚げによって創立された愛知大学としての再生です。

周恩来首相や郭沫若氏、さらに孫平化氏など、その後も愛知大学はいろいろな意味で中国とのかわりを持っていますし、東亜同文書院大学の影響がいろいろなところに出ています。中日大辞典の編集は今泉先生がお話しになりますが、本間学長の中国側への中日大辞典用カードの返還要請が実現された成果です。

さっと流させていただきましたが、私の発表を以上で終わらせていただきます。どうもありがとうございました。(拍手)

ほとんど時間がないそうですので、何かご質問がございましたら夕方へ回させていただきます。